

13  
3403  
4



再栄花川譚卷之四

佐藤藏

何憚のあまきや。言潔くいひをさせし舞臺にて  
 うち悲改男の許いとこのり。くつゝあぶて八橋の密男のこれ  
 正まぐ。誘多人と泣沈む妻のまをるまより。塔の腰押ま  
 蝶も。撲引あけ奥まらるる。脊ををのまへ赴きける。鏡の音も  
 おむり人ともたぐれ。踏らるれど富江郎の頃のみよとて。挑灯も  
 ともまぐ。むらり廊より。小りりして裡より。茂多情は對しより  
 ち方ハ推也。才受も翌の夜ふさや。迫るとなみわれ。羨腐ふ  
 かく憂ひ多ひ。りまう。方小根引が。共つよ。此んと。胸つ。今  
 臂も又。歸りま。さ。い。う。も。凍。ま。で。も。聴。入。り。れ。ど。こ。の。み。決。ふ

昭和二十七年三月十八日 購求

告つひんの潜ひそまままりしておももれた。茂しげきほろろと声を低くし。  
 こゝろを安やすくおぼろも人。受うけの金かねも少しく。調しらひも自まらなくあまま。  
 事こと成なへ。あはらへ。いの廓もあままくちさめあらう。回答こたへもいらなく果。  
 さらふまつ。持つ。小挑こ灯ちやう野の袴はかま見みる侍が対面たいめんよりき。取とりて。  
 茂しげきほろろとありし。おとあらう。こらもあままくあままく。挟さ腹はら富とみ之の進しん。  
 みくありしれ。富とみ之の即すなはちは慌あわたる。隙ひまも納戸の押おし入戸の脚あし。  
 入いり。後進ごしんをまりて。人ひとも富之の進しんもあままくあままく。理入り入り。  
 茂しげきほろろとち新あらた馬うまきつ。せははら清きよくとひひもとそろろ。びを席。  
 薦むしろもりとれ。富とみ之の進しん自まらなく。あままくあままく。や長なが吉きち劍けん術じゆつの

一流いちりゆうを極くる。挟さ野のを即ちは遠とほくをけく立た退ひき。働差さりへき。このよ。  
 あままも男おとこ子の意い氣き地ち是ぜ非ひと及ぶ。れは引之ひ憎にくむ。へき。このよ。  
 この身み富とみ次つぎ郎らう冠かん者しや屋の由ゆ依い。館くわんを逐電てん。臍し元げん土つち京きやう。  
 此こ遠とほ女を誰たれ也。あままくあままく。方へうう。ひもあを。一言いの言をいふ。このよ。  
 全ぜんの由を悪く處へ誘ひなます。言い語ご同どう断だんの悪心あくしん。このよ。  
 かはりもあままく。主しゅ君くんの内意ないを美ます。京きやう録ろく倉くらをあままく。このよ。  
 近ちか曾そうこの江え戸はまりく。遠近とほぢきんを徧徧へん。世よの風声かぜあままく。主しゅ従じゆうのよ。  
 あままく。このよ。の行ゆひもあままく。天あませもあままく。このよ。の沙さ汰た故こ御ごへ渡。  
 下くだり。このよ。は誰也。を文ぶん也。どもかもけららといひ。定おぼ潜ひそま





麻あひつ藤さとうさうろふあふねも。けふありのこが妻つまやうふ不おき義かひの汚かひ名あひあせて  
 八あち男ちゆうの名なまじくでまん子こ。堀ほりまやうまさるるういふいれへ。是非ぜいを論ろんち丁ちゆう八  
 橋はしが首くびうち落おちし。當あつ世せの青あおかく手て料理りやうりを振お舞まふ。其その処ところ  
 へあふび。密ひそままち。相あ伴はんあまていし。あ人もああをあ飛とううアアとと丁ちゆうと  
 切きるまうう向まう梨り割わり車くるま切きり。刺つされる悪わる棍こんも。一い人にんもも死してり。  
 茂も兵へい清せい也やのもああああだだてて。通あつ堀ほりよよのてうまれれ。とと哭な言いれと勇ゆうむむき  
 父ちちもああいい。刀たうをを拭ぬぐぐ。鑿さ小せう納なつ答たふ。ううううれれささうう。ここうう八はち橋はしのは足あし成なり  
 おおいいふふ信しん義ぎ。其その許もとの精せい忠ちゆうはは猛まうままととううもも才さいをを恥はくく。いいああままここのの  
 名なをを告つぐぐ。てて富とみ之の進しん目めにに。言ことををああららううくく。ううりりうう。

これ實まことの油あぶら討うちつる。ちち郎らうをを奪うばつつ才さいなる。技わざ野の郎らうをを門かど常じょう正せいの  
 過あやまつる年とし見みをを討うちまま。その日ひより。復かへ讒せん言ごんののをを焦こがまますす。  
 蟄しづ居ゐのの位ゐをを坐まり。一いつ徒た月つき日ひをを過す。そのちち才さいをを放はなすす。  
 を許ゆるささねねくくより。関せきのの八はち列れつをを編あ歴れき。とと汝なんぢをを索もとめめ。ある時とき下くだ総そうは  
 鉏あ子しほほよりより便べん駟えん。相あ換かんののううへへ赴おもいいととせせ。ふふのの如ごとくく類るいつつままて。  
 既すでにに覆かぶややんん。ととてて此こゝのの所ところ爲なすす。ととてて人ひと本ほん戦せん慄りよくふふ。ととれれのの  
 時とき之のややうう。ととててももななままをを遠とほきき。ととててむむああ。一いつ溺おちち死しんん。その  
 鰐こをを刺つくく。運えんをを天あまののままにに。ととつつうう。膝ひざはは跳はんん。  
 高浪たかねたたちちささくく。ととれれくく千石せんごくをを積つむむ。ちちああららううくく。



悪魚忽ちと浮き出口を閉まると逆まをうをうろく神佛哉  
祈念し短き刀を極めり。鰐の頭小ぶつり。腕のあはるを  
うき破り。その痕はより腫れ出さず。悪魚の爲にや。吾も  
立地は獄入り。又小生へもあぶるを。如くおが介抱せり。数日  
のちや。よく本復せり。一旦鰐の咽喉より。くわ内爛生  
毛髪脱す。あう。癩人のくわなりぬ。む。唐山晋の豫讓の  
灰を天に。乃漆。漆を窠し。仇を寤。これい水。む。そ  
斯。政状昔小異あれ。仇を寤。あ。穴竟や。つ。結ひ  
つ。遠。漆倉。結。昔の若黨。仇。結。訪。妹。水。草

か安否を問は彼。其の日。黒田川原。野人。春。あ。い。ら。ら  
れ。び。の。毎。小。憂。を。う。ま。ね。依。一。共。清。と。も。小。武。差。み。ま。り  
く。水。草。が。い。へ。を。索。し。よ。え。音。原。あ。く。誰。也。と。呼。び。た。女。は  
その人あり。と。必。ま。ひ。け。り。え。や。と。あ。折。し。も。汝。が。在。知。れ  
ら。う。人。壻。を。え。と。む。と。風。は。あ。ま。の。依。一。共。清。を。嫁。と。し。輒。く。これ。を  
謀。課。し。討。果。あ。ん。と。思。ふ。間。も。あ。く。降。り。涌。る。骨。の。騒。動。討  
み。も。せ。ま。妹。脊。の。縁。を。結。つ。る。八。橋。よ。こ。が。人。を。明。さ。る。色。い  
迷。ひ。く。彼。女。子。を。陪。り。と。似。たり。と。思。ひ。出。り。み。實。を。り。ん。て  
せ。へ。八。橋。あ。く。悲。し。く。何。と。そ。う。な。か。骨。を。到。こ。ひ。の。仇。討



を延てえ。舎見をよふ眞實の切なる托跡止うと。打首ハ  
りふ一日。これいふ怒たてえりりぞや。人の賢愚奇うふまへいと。  
雙言くまぐらふその行ひ見の忠あり妹ハ義あり。そまは引く吾侪  
ハ人倫の道不疎く。兄ハくま世の人ハ憎ま妹ハ又河津の流み沈  
むのこなすは。歎み似る過あり忠ある茂共情を討てて兄の  
冤ハ雪とも。妹ハ悪名ハ雪がごと。をりくハ橋が志を空うとん。  
この首打く小次郎を情がよ下の奴系切刺も。塔と舅ハ因縁  
縁故斯のごとくと物語ハ富之進もうち誓き。冥も今  
悪りのともを討置。よのうち只人なす。まきとやハハハ。叔ハ

挾次郎をふとありつる声音ハ昔ふりねど。その人とも  
とられま。いひも果てその處へ嫁の仇一其情一室よりと出て  
近曾船川戸は位ひく。敵へ多引の媒ハ挾世の若黨仇一  
其情。まが爲まの主の仇茂を情はふと結らせり。茂を情縁  
由をばく。誓くといくも。文小騒がま。次郎を赤ハ。ハハハ  
坐をト男を磨く。隠家の茂を情。妹ハ橋ハ助ら。是面押拭  
く存命へき欽いさ立ある。兄の仇首打おとて。多向人  
といひつ。頭さ。伸せ。い。あや。乃。く。次郎を馬刀。ま。ま  
と。接。放。く。茂。を。情。ハ。誓。切。を。い。冠。者。ハ。め。を。か。ま。い。罪。阿。る

下  
品  
茂き清を濁るを歩つ。私に討つ。この子殿のおひも達し。  
敵討の後日の沙汰空衣を刺る例もある。ひ首は換る髪は法  
の御導の吾妹子が。麻で髪を縛る。一睡わかれの善悪も。うさ  
くま世へおれも。その本。隠家には茂睡入道と法号。妹  
のふき跡吊れ。と。り。茂き清も感伏し。命を惜む。あ。ね  
も。志む。い。こ。ふ。ま。み。川。な。ら。う。才。を。哀。れ。て。い。ひ。こ。え。て  
ひくも。え。よ。付。乳。の。山。の。草。の。戸。ふ。る。月。再。會。を。期。ま。べ。し。と。折。え  
の。必。き。碑。の。一。首。は。これ。と。あ。ま。ま。さ。り。富。之。進。も。感。激。し。一。旦。の  
我。は。伏。す。次。郎。を。仇。を。又。逢。せ。し。も。又。逢。し。が。ま。き。の。富。次。郎。室

坊主所へえおき。と。お。け。戸。棚。み。を。か。つ。を。明。さ。せ。と。  
隠家が阻つ。攘つ。あ。ら。う。種。み。戸。を。引。と。あ。せ。の。押。入。の。後。の  
髪。を。切。抜。く。裡。に。又。不。人。も。な。り。ま。て。の。妻。細。は。夢。さ。り。と。  
面目ふさ。あ。逢。せ。し。一。但。一。お。り。の。子。の。あ。く。へ。正。ま。え  
吉原冠者次郎の面才の上も。お。ほ。つ。り。と。く。富。之。進。の。り  
より。刀。お。走。出。ま。の。茂。き。清。は。さ。り。次。郎。を。捕。つ。付。一。番。も  
流。も。小。裳。を。塞。ぐ。追。り。する。  
第五編の誰也行燈の縁故  
狭隈富次郎の戸棚の中かかれ居る。兄富之進がお清を

一五十一 父もいけ、大母もききく悔恥はとて。今はそのいふ  
 うま、秘もせま、誰也を刺殺して、我廬の汚名をすま  
 腹もき切らんと思ひ、定め潜し、壁を切破りて。その夜、言  
 原も走りしき。誰也を呼出さし、いりり、牙の根引の  
 りもつま。冠者さほも志せま、せま、茂も清がべき軍  
 ありとて、只今彼処の揚屋にあり。誘ひ入り、た右の人を  
 遊るも、誰也これを實と。うれきす、小倉に、いね、  
 禿のこを推り、走り、出富公邸ととも小賢、虎寺所のこ  
 赴く小廓の子四も、や、い、闇き夜、常より、  
 往

まのそや、迹絶さる。時分なり、富次郎、技も、又、後  
 り。誰也を撲地と切伏せ。起しも立まらぬ、刀尖、鎌、  
 声も、らも、い、泣生を、奉、周章。む、り、け、  
 えつけ、ま、人、殺、い、い、証、と、あ、ま、の、  
 捉、入、と、闇、ハ、自、害、す、る、も、あ、れ、  
 切、も、い、ど、い、究、一、死、の、程、い、を、  
 ひ、不、碎、易、い、ま、お、り、い、  
 と、持、る、刀、を、さ、り、ま、の、  
 正、莫、い、つ、ま、る、小、女、  
 持、る、刀、を、さ、り、ま、の、  
 正、莫、い、つ、ま、る、小、女、







命の死も。挾隈の悪の意趣切といひく。侍へのあつらふ。君は浮名も消ぬ。くも明しき。物の圍せ。如の月。あつらふ。只の身を合きて。富次郎。今般れ。本政王。即ち。それ。恨引く。妹が。家胡も。かの。小忠義の。つら。く。ろ。ま。さ。り。と。い。ふ。い。ち。ぬ。歎きを。さ。む。り。の。さ。ひ。迫り。冠者次郎。抄。薩より。立生。多。い。さ。う。色慾の。迷。り。罪。あき人を。殺せ。事。顧ま。る。面目。さ。う。あ。う。さ。て。七。館へ。歸。り。ま。き。へ。前。頃。故。御。より。武藏。へ。赴。く。船。中。あ。く。小。櫓。形。の。宝。劔。を。海。底。へ。沈。め。れ。ば。先。祖。へ。不。幸。見。上。ふ。い。ひ。も。け。あ。し。

と宣へ。次郎を。出。門。す。と。出。る。の。儀。へ。由。こ。ら。安。ら。く。と。さ。し。か。り。日。外。為。も。も。る。鰐。の。腰。を。浦。へ。お。ふ。引。取。せ。り。内。に。一。振。の。劔。あ。り。と。さ。う。も。あ。ぬ。御。家。の。重。宝。小。つ。ま。り。と。の。名。劔。や。れ。ば。り。や。義。康。君。へ。入。水。す。は。せ。ら。と。俗。に。あ。ら。う。を。離。さ。げ。所。持。い。と。せ。り。い。さ。く。返。し。進。め。せ。ん。と。い。ひ。つ。腰。に。る。刀。を。取。り。冠。者。次。郎。へ。獻。ま。り。義。康。も。い。ち。も。さ。り。か。り。と。さ。か。く。不。思。議。の。忠。節。ぞ。と。次。郎。は。是。つ。我。賞。美。し。と。本。領。安。塔。の。吹。捧。せ。り。か。る。上。へ。冠。者。様。に。此。仕。仕。し。と。さ。う。に。任。意。水。さ。ぎ。は。り。せ。り。海。へ。茂。り。清。き。て。

廓くわくの出入でいりのきかろふ。執しやくむさわんとしあど。まうふの汝ぢんちらう  
 せんせんとく。帰き路ろを促うながす富とみ之進しん。おろす身みの死し生の旅たび冥めい  
 土どの闇やみを照てつてまてかの手て向むかへしや行あ燈いろうを五ごツの町まち母  
 おく事こといこの因縁いんえんとまろ。鞆つづみ組ぐみ挾あ時とき一いち次じ奇き在ざよ八はち橋はしも廓  
 みかはおろろ。妻つま恋こふ稚き子こも浅草あさくさふその隠か家かのかくれ  
 なき色いろの里さと具ぐと小こ予よ所ところ故こあ。替か禮らい敷しと。めでさう  
 栄さかふひーとまん。

花川卷之四大尾

○文化十三年 丙子正月吉日新刻目錄

再さい栄えい花か川がわ譚たん 曲きょく亭てい馬ま琴きん著しやく 全部四册

繡きう像ざう羽う衣い物ぶつ語ご 雲うん輝き堂どう著しやく 全部六册

阿あ初しよ 窓まど螢へい餘よ譚たん 東とう都と曲きょく亭てい馬ま琴きん叙しよ 全部六册

繪えい本ほん鉢へちま冠かん譚たん 栗り杖じやう亭てい鬼おに卯う著しやく 全部七册

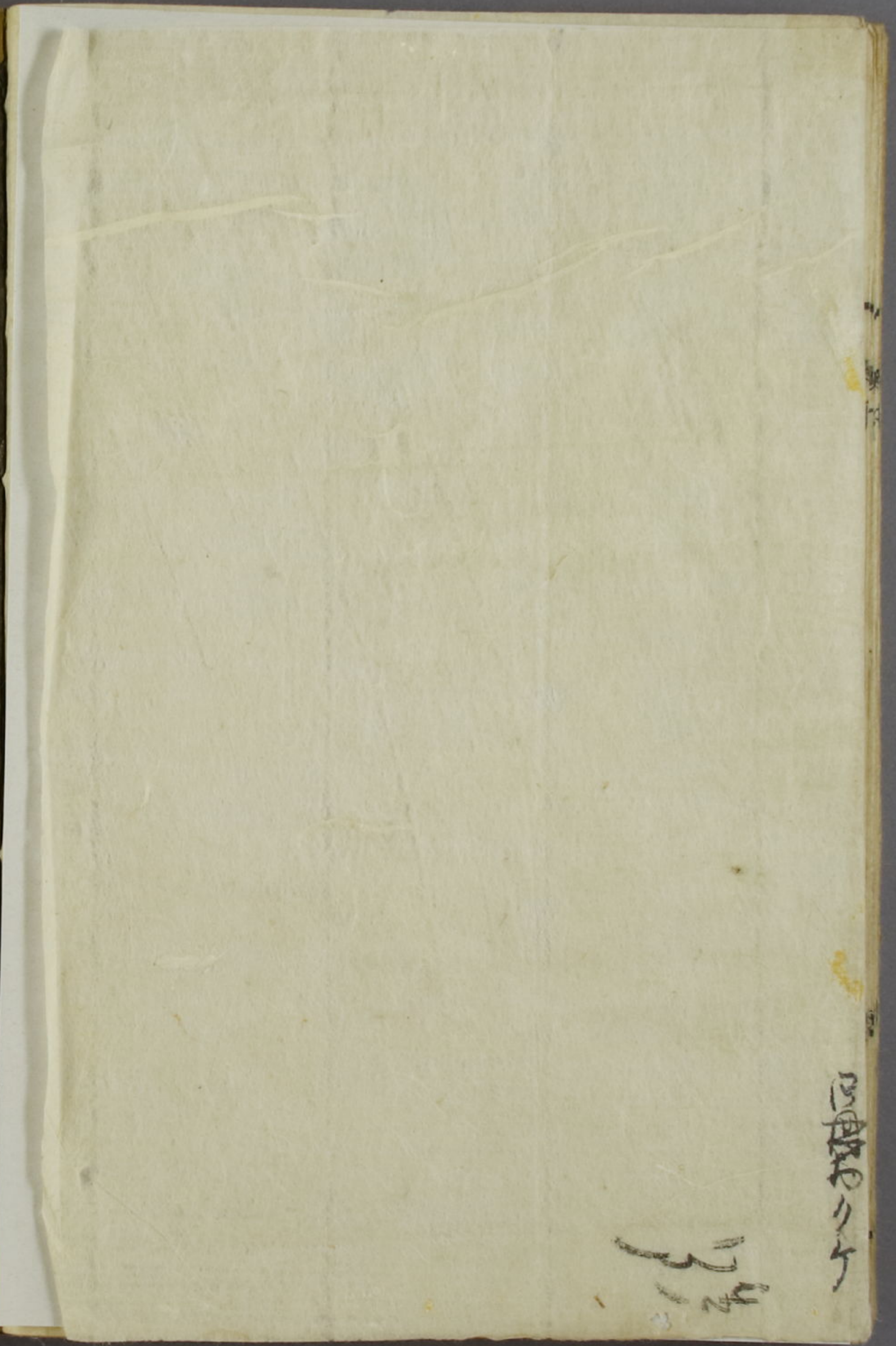
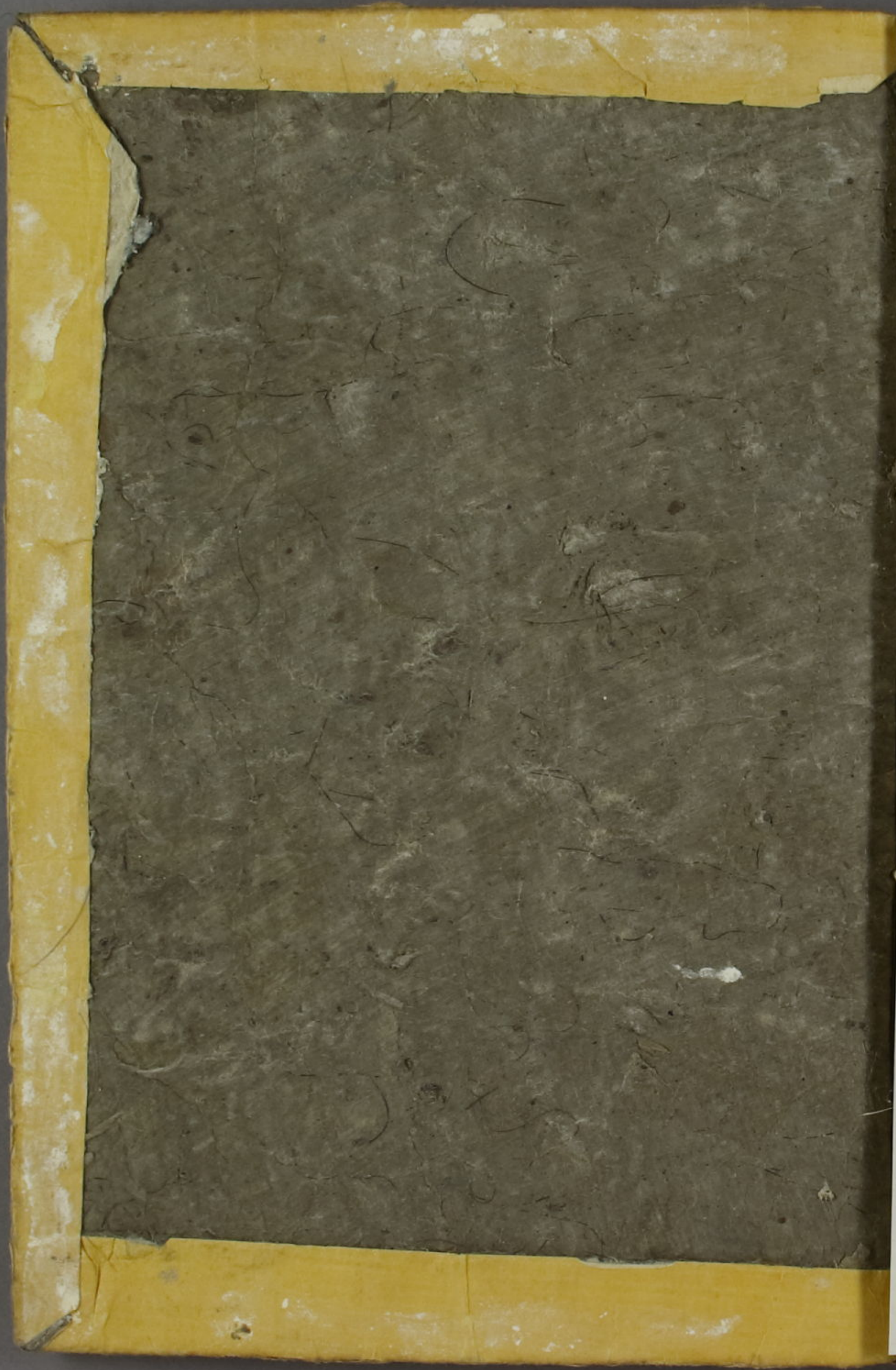
長ちやう有ゆう湯たうつ 深ふか揚やう桂けい河か水すい 右みぎ同どう断たん 全部五册

復ふく雙しやう言げん 幸さい物ぶつ語ご 右みぎ同どう断たん 全部六册

け書かきハま中ちゆうに画ゑ漢わんたうく人を喜よろこぶを能あたりし幸さいあり  
 物ものと天あま喜よろこぶを能あたりし幸さいあり  
 年としの終はつりけるの終はつりけるの幸さいあり

皇都書林 富小路通錦小路上町 丸屋善兵衛





四  
十  
二  
年  
十  
月  
十  
日

三  
十  
日

